

八月午後ソロモン中央水路を経てガダルカナル島に**邁進**した。

この艦隊は同日夜、哨戒線を突破して敵主力部隊に奇襲的夜戦を開始した。激闘五十三分、洋上には残存する敵影も無く巡洋艦八隻、駆逐艦六隻撃沈と報ぜられた。

艦隊司令長官は天明後の敵の航空攻撃を考慮し、泊地に集結していた敵輸送船団に対する攻撃を行うことなく帰途に就いた。かくして我が反撃作戦の最初の好機は失われたが、これがいわゆる第一次ソロモン海戦の序幕であった。

空母「神鷹」の最後

滋賀県 上田 二郎

私は大正十五（一九二六）年十月十七日上田塾一の二男として滋賀県滋賀郡葛川村字細川で生まれる。当時の家族構成は、祖父母、父母、兄弟姉妹の九人でした。地元の葛川尋常高等小学校を卒業、旧制の京都工学校に一年間学びました。

当時は戦争もたけなわとなり、早く行って苦勞せよとの、父の説得により、昭和十七（一九四二）年九月検査を受け、約百人中四十五人が合格し、私もその中の一人でした。

昭和十八年四月三十日、舞鶴海兵団に入団するため故郷を「祝入団上田二郎君」の旗三本と共に家を出発、愛国婦人会、軍友会、小学校、各部落、村総出で村社、地主神社で出陣式が行われ「撃ちてしまぬの精神でアメ公を倒すまで頑張ってください」との挨拶をして村の峠を越え故郷を後にし

ました。

海軍に入団して真面目に、気力を出し思いやりの精神を持てば必ず認めてくれると、隣の先輩の話でしたが、現実はそのようなものではなかった。ときには個人の事でも集団罰直は日常茶飯事でした。精神注入棒で尻を叩かれ、「歯を食いしばれ」で拳骨で顎を殴られるのが、これも日常茶飯事のことでした。しかし戦況悪化の昭和十九年後半になって、だんだんとそのような変化し、自分の階級が昇るとこのような罰直は少なくなったように思います。

新兵教育の後半、海上訓練では日露戦争時に大活躍した軍艦「吾妻」が岸壁に係留されていて、そこで艦務実習である甲板洗い、艦橋で操舵、見張りの体得、ロープの扱い、係留方法等を体験しました。

一方陸上訓練では、早朝より片道十キロ余の福知山の長田野練習場の陸戦が行われ紅、白に分れての攻撃合戦は今思うとこの苛酷な訓練をよくも

耐えたものであると思う。水筒の水が無くなり雨水の「タマリ」に手を出し吸引したこともありですが、よくぞ病気にならなかったものです。この後が大変でした。この訓練が終了し、一斉に空に向け銃を立て引金を引いた瞬間、仲間から一発の空砲が発射されたのではないか、これは一大事で本人のみならず班員全員が夕飯抜ききの罰直受けたことがあります。ウラム節ではないがもう少し友が早く気が付けばな……と思ったことでしたがすべての後の祭りでした。

あるとき集合が掛かり行つて見ると、ある先輩（水兵長）がとある女性からの恋文が分隊事務室に舞い込んだのです。さあ大変、当人が全裸になり水が満杯のオスタップ（金属製のタライ）の中へ入るよう、これが俗にいう見せしめであり、全体の規律を守る上での大切なことでもあったかな……と思います。

水雷学校生徒の時、とある仲間が屋上に乾かしていたパッチがなくなり、それを運悪く盗み衛兵

に見つかったことがありました。大変、室に帰りバットで立ち上れないほど殴られてハンモックで三日間寝込んでいる様を見ますと、さすがに軍律の厳しさを痛感させられたものです。また防備隊勤務のおり「成生」に乘組み日本海沿岸警備のある日、とある先輩（水兵長）から呼び出され「下士官の指示で若者が少し気が抜けている、締め直せとの指示が出たので君達を呼んだ。こんな小さい船で君達に罰を加える事は忍びない。手で合図するからその時は大きな声で、返事しなさい」とのことでした。そこで七、八回ぐらい気合を入れられている様子で「ハイッ」と言ったと思いますがああときのこのような温情あることに感謝するのみでした。

舞鶴一分隊の勤務には衛兵、公用使、小型船での将校の送迎などがありますが、西側で立番中、無遊病者のごとくフラフラと動く黒い人影を見ました。そのとき、夜の消灯時刻が終わったところで直ちに近づき事の詳細を聞いたところ、脱走したく

てここにやってきたとのこと。私は順々に諭し、辛いのは皆一緒、頑張るんだと励まし、衛兵伍長には内緒で帰隊させたこともありました。

そして昭和十九年十一月七日辞令でスラバヤの第二十一特別根拠地隊へ転属命令を拝受、陸路舞鶴より九州門司港へ出発しました。

ジャワ島転属と空母「神鷹」の出撃

昭和十九年十一月九日、秋雨煙る舞鶴母港を後に私たち大藪上曹以下十一人全員（高、普練水雷）はスラバヤ第二十一根拠地隊転属命令を受け、門司港に停泊中の空母「神鷹」に乗艦しました。「神鷹」は内地からシンガポールまでを往復する船団を護衛するのが任務だった。

この船団は「ヒ八一船団」と称し、九、〇〇〇トン級の船が五隻で、これは陸軍のもので比島増援部隊二個師団の主力を満載した特殊船群でした。これに南方へ油積み取りのタンカー一〇、〇〇〇トン級五隻をもって編成した高速船団であった。

一方の護衛陣は海防艦七隻、空母「神鷹」とこ

れを直衛する駆逐艦「樫」である。この「神鷹」には定員八百三十人の外に、南方各地に赴任する便乗者を含めて約千二百余人が乗艦していた。

十一月十二日、門司沖六連泊地を午前七時に出港、船団を編成しつつ三列縦隊で十二ノット航行、玄界灘から五島列島の西方に出ました。

「神鷹」は、常に船団の後方を追尾しつつ、このころより頻繁に、九三一空（佐伯所属）の九七式艦攻が盛んに発艦、前後左右を対潜哨戒していました。夜明けから日没まで連続の繰り返しであった。私ども便乗者は、出港時より見張り要員として二人ずつ、六班編成で格納庫後部のマスト付近に配置されていました。

十一月十四日は長崎宇久島で仮泊、翌十五日、宇久島を抜錨して南下、正午近く突如、船団の一隻に水柱が十五メートルぐらゐの高さに立ちました。その船は船団の左列中部にいた陸軍の「あきつ丸」で、九、一八九トン、兵員を満載していました。そして水柱の消え去るのとはほぼ同時に迫撃

砲弾により後部弾薬に誘爆して火災が発生し、わずか三分後に裏返しの状態で全没しました。

不吉な予感が脳裏をかすめる。このときすでに戦闘配置につけのラッパが鳴り、私共全員は左右両舷に別れて見張りの配置につく。このとき隊列から離脱した海防艦は縦横に海原をかけ回り爆雷攻撃を敢行していました。まさに死に物狂いで、遠雷のごとく不気味な音と水柱が水平線かなたに火花のごとく見える。ヤンキーの奴、白昼から大胆不敵にもと怒りがこみ上げてきました。

再び船団の隊列が再編され、日没から艦内哨戒第二配備となり、さらに厳重な警戒のもと航行を続行しました。

このころより船団は五島列島沿いではなく、針路を南方向より北方向に転舵し、済州島に向う。東シナ海はまさに敵潜の徘徊で巢窟化しているとの情報にキヤッチ、とりあえず済州島沖の入江で二日間仮泊しました。この間も敵潜の捕捉のために九七艦攻が矢次早に発艦し、磁探機による素敵

を繰り返していました。

明けて十一月十七日、朝鮮半島が眺望出来るほどに初冬の空は澄みわたり、季節風の吹く海上には白波が立ち、対潜監視は少々困難でしたが、視界は極めて良好でした。

午前八時各艦各船は徐々に島を離れ、整然と隊形を組み、上海沖に針路をとる。この日最後の索敵、対潜警戒の任についていた九七艦攻が一機、二機と順番に着艦し、最後尾の四番機が着艦、直ちにマストが復元される。前部マストの軍艦旗は夕暮れの海に重く軽くはためいている。波も静か、格納甲板より見る各艦船は一隻の喪失を除いて、船団指揮船で最前列を行く「聖川丸」の佐藤勉少将座乗の将官旗がたのもしく思えました。

このとき「戦闘配置につけ！」の艦内放送、午後五時四十五分であった。「神鷹」の左舷前方航行中の「摩耶山丸」に突然水柱があがった。それから二秒ほどしてズーン！ズーン！と腹に響く音がしました。水柱が薄い煙を残して消えた時、

すでにその船影はありませんでした。轟沈でした。当艦が雷跡を発見したときは、もう遅かったのです。大型船でも商船はもういもです。「摩耶山丸」には二千三百人近い陸兵と軍馬二百余頭が満載されていました。索敵飛行の谷間に外れて敵潜が潜んでいたのか、それとも索敵に見落としがあつたのか、数千の兵員、作戦資材が海の藻屑と消えました。ぶっつけようのない悲しみと怒りがこみあげてくる。

被雷！ 沈没

午後十一時、見張り配置より交替し床に横になろうとしたその瞬間、「総員配置につけ！」。その艦内放送がまだ止まないうちにズーンと天地も裂ける大音響、続いて二発、三発の大爆音です。艦内は真暗闇、何も見えない。少し腹ばいになり暗闇を見ていました。「最期が来たか！くそ死んでなるものか」と。

その時エンカン服を着た乗員が俺の後について来いと懐中電灯を照射しながら飛行甲板へのラッ

タルを昇る。間髪を入れずその後が続く。飛行甲板に昇ると、そこは全くの地獄図のごとくでした。艦はすでに一〇度ぐらい傾いていました。空母の弱点は汽油燃料のほか揮発性の高い航空燃料を大量に搭載していることです。「神鷹」には前後部に各二十万リットルのタンクがあり、後部はすでに炎に囲まれ、艦攻が撃索より外れ、二機、三機と炎の中から海中に落下します。

海は火の地獄と化しました。第二十一根拠地隊の戦友たちはどうしただろうか。もちろん探すすべもありませんでした。

やがて炎が前部にも燃え移り、少しずつ傾斜し、もう飛行甲板に立っていられない。おだやかな風の海でしたが、炎が風を呼びゴーゴーと音をたて猛烈な勢いで燃えます。水面から飛行甲板まで約十八メートル、しかし火柱はそれよりも数メートル高く上がっています。

火炎で明るい熱気と煙りで視界が悪くなってきました。まだ大勢の戦友が甲板に腹ばいながら

炎の中を右往左往しているのです。甲板より低い機銃座も炎に包まれ、あちこちから弾薬の誘爆音で危険極まりない。その機銃甲板より「艦長！ 艦長！」と呼ぶ声があるが、ついに艦長の姿を見ることが出来ませんでした。

期せずして戦友たちの中から「天皇陛下万歳！」「神鷹万歳！」と海鳴りのごとく叫びが上がりましたが、いまだ「総員！ 退艦！」の命令は聞こえない。艦は徐々に右傾の度を増してきました。

退艦！ 漂流！ 死から生へ

もはやこれまでかと、自らの意志で海へ飛び込んだのか、皆に押されて落ちたのか分からないが、まだ十五・六メートルはあるだろう飛行甲板から「エイツー」と飛び込みました。着水までが長かったこと、そして必死でもがきながらようやく海面に浮き上がる。苦しい。「バルヂ」に激突しなくて良かったと思う。

ここには危険だ、艦より少しでも離れようと、力いっぱい、夢中で百メートルぐらい泳いだ

だろうか、方向を確認しようと燃えてる艦に眼をやると、まだ飛び込むのをためらっている者、バルヂに足を掛け必死にしがみついている者もいる。

このころより、あちこちに小集団で元気に軍歌や「神鷹万歳!」、「おーい! おーい!」と戦友の名を呼ぶ声が聞こえてくる。お互いを励まし自分の所在を確認し合っています。私は最初は流木につかまっていたのですが、次第に大勢の人が寄り添ってきたため浮力がなくなりかえって疲れ、加えて味方の爆雷攻撃の凄まじいこと、ズシンと腸がえぐる思いがします。教練で習った背泳をしました。いくらか衝撃が少ない。まだまだ爆雷攻撃が間断なく続けられている背中に振動が伝わってきました。

ついに「神鷹」の最後が来ました。菊のご紋章のついた艦首を闇夜の空に突き刺す形で、まだ燃えさかる海面にその姿を没しました。

期せずして「サヨナラー神鷹」と夜の海に三々五々聞こえて来ます。その時間は約三十分だった

だろうか、重油やガソリンの猛火に包まれながら何とか乗組員が退艦するまで持ちこたえ頑張ってくれたことに、悲運ではあるが涙する思いでした。

火が消えると風もなくなり、海が静かで見えるものは星だけでした。突然バン・バンと砲音がする、敵潜が大胆にも浮上し攻撃して来たのです。

「何クソー 泳いでいる者まで皆殺しとは、もう今世の終わりか」と神や仏にお願いしました。

息をひそめて待つことしばし、もとの静けさにかえり、ここまで生きてこられたのだから、あとは体力の消耗を防ぎ救助が来てくれるのを待つしかないと自分に言い聞かせ、大勢の中に入ろうと泳ぎ、その集団の中に入ることが出来ました。

それは水浸しのカッターでした、名前も階級も分からないが数時間前までの戦友である、カッターの縁に片手で捕まり励まし合うもその意気がだんだん衰えて来るように思う、十一月の東シナ海は寒い、寒いから小便が出る、この小便が出る度に膝を合わせて温かい小便で足を温める、まさに

窮すれば通ずるでした。

やがて元気な声もなくなり睡魔がおそって来る、皆も同じだ、寒い、冷たい、という感じが次第に鈍くなって来るのをおぼえました。

海に飛び込んでから、もうかれこれ三時間ぐらいい過ぎたであろうか、体が波に乗ってゆっくりゆっくり上下する。睡魔におそわれたのか、すでに息たえてしまったのか、この静けさが空しく続く。突然「お母さん！」「お母あ！」と泣き叫ぶ声が遠くの方から聞こえて来ました。

これに合わせて、あちこちから赤ん坊が母を慕うかのように弱々しい声で、あたかも救いを求め自分の死を直感したような、その声もまた、夜の海に消えていきました。

私もやがて睡魔におそわれたのか分からない、故郷の山や川、裸で川に泳ぎ「アブ」に刺されたこと、母に連れられて行ったお寺の団子まきのこと、宮の鎮守の禰宜参り、その時父がくれた黒砂糖入りの餅を一口食べた時、パッと目が覚めまし

た。瞬間回りが「ギャ・ギャ」とウメキ声がする。ハツと我にかえり周囲を見ますと、小山のような船がゆっくり静かに近づいて来る、救助に来てくれたのだ。

やがてその船から「オーイ！ 来たぞー」の声。周囲の仲間から渾身の力を出して手を振り、泣き叫ぶ者、カッターが降ろされ水を切る櫂の音がする。やがて救助員から「中に入るな、縁に捕まっている、しっかりするんだ」と励まされながら船に連れられ縄梯子が降ろされました。

意識が戻った時は、着ていたものは全部はがされ、毛布が掛けられてありました。生きていることを実感し、戦友の情けに感謝し涙があふれ出しました。この艦こそ直衛の駆逐艦「樫」でした。舷窓から見る海は茶褐色をていしており、どこに行か分からない。記録によると「樫」は四十二人、「久米」は十九人の計六十一人を救助したとのこと。かくして「樫」乗組員の温いお世話で上海海軍病院に収容されたのです。

そして体の回復を待つて、私達スラバヤ赴任者五人は次の任地に行くべく、いったん上海海軍陸戦隊に仮入隊し次の船便を待つこととなった。

上海陸戦隊仮入隊中に台湾へ転進することとなり、大連―高雄間の連絡船が上海港に寄港すると連絡を受け、直ちに身の回りの品を整理し港へ向いました。ちょうど港には海軍艦艇も五、六隻繫留停泊していましたが、一際目立った白い船がありました。それが我らが乗組む「永山丸」(三、〇〇トン)でした。早速、当直船員にことの次第を報告し乗船しました。

しばらくは支那大陸沿岸に沿って南へ航路を続けながら航海し、バシー海峡に入りますとだんだん波が荒くなり、また敵潜の動きが心配でしたが、一夜明けたころには台湾の山々がかすかに見え隠れして来ました。間もなく基隆港埠頭へと接岸し上陸しました。陸路台湾鉄道にて南に所在する高雄警備府へ向いました。

そして高雄海兵団付となりました。戦況は日々

悪化し南へ行く船は全くなく、制空権はアメリカ軍のものと化し、日本機は時たま空を五、六機飛ばす程度のものでした。

このころ訓練と言えば毎日空襲に対処するための壕掘りと「蛸つば」掘りが日課でした。台湾兵とは実に和気あいあいと軍務に励み、また外出や余興には、随分お世話になったものです。あの台湾兵の思想はいつから発生したかは定かでないのですが実に立派で日本人顔負けの気風を持ち頭の下がる思いでした。

終戦には、あの忘れ得ぬ終戦詔勅を部隊全員で聞き、後は蟬の抜殻のごとく、無の境地に入り込み、我れを忘れていたことしばしでした。三時間後、台湾軍人は身辺整理した後直ちに帰郷の旨通達があり、我々は命あるまで隊に居留せよとの命令でした。

二日後の十七日、台湾軍人との最後の別れの朝食は、これまでになかった食卓食で、苦楽を共にして来た戦友の労に感謝し、平和とそれぞれの国

家復興に努力しようとの司令の訓辞があり、六カ月の間苦楽を共にして来た戦友たちと「帽振れ！」で「元気で、幸せになろうな……」と再度の「帽振れ！」で永久の別離となりました。今彼らはどこでどんな境地で日々生活しているだろうかと思う毎日です。

ここで我々は台中市近くの南投の山岳部に入り、野小屋（二十人ぐらい寝泊り出来る小屋）四棟に分かれて奥山のパルプ材搬出用トロッコ列車の道作り作業に従事しました。毎日監督が付くではなく、時々仕上り具合を見に来る程度で、軍歌を歌いながらの作業でした。支那軍は我々日本軍を今だに恐れているのだろうか？ との気にしたこともあります。休憩時にお茶でも出すと「シェーシュー」と言つて帰つて行きました。

この作業に付いてから六カ月余経つたある日、引揚作業に関係している旧将校が山に見え「皆様、長い間のご苦勞感謝します。待ちに待つた内地引き揚げ日程の連絡が入りましたので、連絡に参り

ました。食糧倉庫の維持管理は街の郡長に一任してありますので、身辺整理のうえ一月三十日正午までに基隆港へ集結して下さい」とのことでした。

その夜は酒保の酒、ビールが空になるまで飲めや歌えの大騒ぎでした。翌々日、各自衣納袋に身の回り品を詰め込み、港へ向いました。岸壁にはすでに各地から婦女子、旧軍人が参集し混雑していましたが、係官の統一された指導で整列、前方を見ると懐かしい駆逐艦が入っていました。乗員に聞くと海軍駆逐艦「波風」でした。よくぞともに生き抜いてこの地までお迎えに来てくれたことと手を合せ感謝したい気持ちでした。

台湾での思い出は数々あります。一年余台湾で無事過せたこと、一瞬に大型防空壕で五十人余の戦友が死を遂げたこと、もちろん台湾軍人との心の触れ合い、「山なみ」「街並み」を眺望しながら二度と来られぬ思いの地、万仏にすべて感謝しました。

船は次第に船足が早くなり、船尾より吹き上げ

る水泡は六メートルも高く、故郷日本へとエンジンも快調ですが帝国海軍は早い。沖繩列島を左に見ながら「天気晴朗波高し」でした。

二日後豊後水道を通り呉港旧大竹海兵団に帰還し、見るものすべてが懐かしさいっぱい之感無量でした。冬の安芸の国は寒かったのですが早速諸手続きと検疫を済ませ、大浴場で心身共にリフレッシュしました。

夕刻大講堂で帰還の宴が催され、翌朝衣料、缶詰など食料を受領し、長い間の戦友たちの友誼に感謝しつつ、元気で頑張ろう、いつの日か再会することを誓いそれぞれ両親、兄弟の持つ故郷へと帰っていったのです。

空母「神鷹」が沈没してから、六十余年の歳月が流れた。あの時東シナ海の水漬く屍と散っていた石井芸江艦長以下千六十人のご冥福を祈りませぬ。

【解説】

体験記筆者の乗艦した空母「神鷹」は、第二次世界大戦の勃発により、ドイツに帰れなくなったため神戸に係留されていたアジア航路の高速客船「シヤルンホルスト号」で、太平洋戦争におけるミッドウェー海戦後の空母喪失と空母増強の中で、調査の結果、空母「大鷹」とほぼ同じ能力の空母に改造できることが分かり、海軍が買収して改造を行い、昭和十八年十二月竣工した空母である。

公式要目を見ると、公式排水量二〇、九〇〇トン、水線長百八十九メートル、水線幅二十六メートル、出力二六、〇〇〇馬力、速力二十一ノット、飛行甲板百八×二十四・五メートル、乗組員数八百三十四人、搭載機数二十七機で、このクラスとしては最も広い飛行甲板と格納庫を持ち、船団護衛の新戦力として期待されていた。

しかしシンガポールへ向かう船団護衛の任務中の昭和十九年十一月十七日、濟州島西方海面で米潜水艦の雷撃により沈没した。

筆者は昭和十九年十一月九日、第二十一特別根

拠地隊転属の命令を受け、門司港で「神鷹」に乗艦した。「神鷹」は前記のごとく船団護衛でシンガポール向けに出港するところであり、この模様は体験記に詳しい。

「神鷹」沈没により、海に飛び込んでから約三時間以上漂流をつづけ、上海海軍病院に収容される。スラバヤの第二十一特別根拠地隊への赴任者五人は、体力の回復を待つべくいったん上海海軍陸戦隊に仮入隊となり、次の船便を待つ間に台湾転進の命により基隆に上陸、高雄海兵団付となり終戦、数々の台湾での思い出を持って昭和二十一年一月、基隆港から呉港へ復員した。

これより先、昭和十七年三月、蘭印最後の拠点であったジャワの陥落により、蘭印攻略部隊は担当地区の警備、残敵掃討、海上交通の保護、資源開発、軍政等を実施するため、所管域であるスラバヤ、バリックパン、マカッサルに第二十三、アンボンには第二十四の特別根拠地隊が駐屯していた。

ちなみに筆者の赴任するべき第二十一特別根拠地隊は、次の編成であった。

第二南遣艦隊（司令長官 高橋伊望中将）所属

第二十一特別根拠地隊 スラバヤ

司令官 久保九次少将

旗艦「白鷹」、第十一、第十二哨戒艇、

第一、第二駆潜隊、第一港務部、

第三十三航空隊、「辰官丸」、

第二十一駆潜隊、第二十一潜水艦基地隊